武家屋敷の礎石

この色とりどりの石畳は、かつてここにあった武家屋敷の配置を表している。左側の土塁は三の丸の外縁で、武士しか住むことが許されなかった。この屋敷は土塁に極めて接近して建てられており、城内の空間が貴重であったことがうかがえる。
1728 年の松本城の下絵図によると、木村武兵衛と玉川助之丞の二人の屋敷が、この土塁の近くにあった。両家とも中級の武士であり、家屋も同程度の大きさであったと思われる。基礎の位置や寸法から判断して、かつてここに立っていたのは木村武兵衛の住居だった可能性が高いと考えられる。
敷地面積は東西約 25m、南北約 31m。正面玄関は東向きで、小さな副玄関は土台所につながっていた。建物は、礎石の上に木の柱を立てて支えている。
邸内には人工の池（青色部分）があり、2 つの泉が湧き出していていた。また、住居の南側から発見された大きな甕は、水を貯めるために使われた可能性がある。このような甕はトイレ（簡易便所）でよく使われるものだが、甕から採取した土には人の糞便が溜まっていることは分からなかった。